襟袍(えりふき)を 口絵に移す 清方(きよかた)の
厨(くりや)に立てる 風懐(ふうかい)のひと

令和六年六月十三日

大中臣正比呂

当時、鏑木清方(かぶらぎきよかた)が住む木挽町(こびきちょう)の宅を、脱稿した原稿を携えて泉鏡花が訪ねて来たことがあると云う。口絵や表紙の絵を頼みに来たのだ。

清方の日本画は美人画ならずとも、凛とした筆で美しい。

筆者がもしも歌集を出すなら、表紙も日本画にかぎる。

厨には各人の生き様がある。食は精神と命を養うからであろう。

いつか、厨に立つモデルとなった女(ひと)と、

清方が晩年に暮らした鎌倉を訪ねてみたい。